歩行期における情動の自己制御の発達に関する理論的考察

教育心理学コース　坂　上　裕　子

How Are Children Able to Regulate Their Own Emotions ?
A Theoretical Consideration about the Development of
Emotional Self-Regulation in Toddlerhood

Hiroko SAKAGAMI

Emotion regulation (ER) is viewed as one of the key concepts in the research of socioemtional development now. However, scant attention has been paid to the developmental trend of ER. In this article, the development of emotional self-regulation in toddlerhood is discussed in relation to the emergence of representative ability, mainly pretense and language. It is argued that there are two aspects of development. First, the strategies that young children use to modulate their emotions increase dramatically in repertoir. That is, children begin to use pretense, image, and language as regulators of emotion. Second, the regulation strategies come to be used more effectively, and anticipatory regulation strategies also come be seen through the development of emotional understanding.

目　次

Ⅰ．情動制御とは
　A　「情動制御」という概念
　B　情動制御方略の種類
Ⅱ．歩行期における情動の自己制御の発達
　A　情動制御研究における歩行期の位置づけ
　B　ふりやイメージの発達と情動制御
　C　言語の発達と情動制御
　D　情動理解の発達と情動制御
Ⅲ．まとめ

Ⅰ．情動制御とは

A　「情動制御」という概念

情動というトピックは現今，心理学に留まらず学際的な関心を集めている。近年の情動観の変化や情動研究の隆盛に伴って，情動制御という概念は情動発達研究の鍵概念の一つとして位置づけられるようになってきている。

「情動制御」という語は，一般に，情動の喚起や反応を何らかの形で制御する過程を指す語として用いられている。この術語の定義の詳細に関しては実は未だ統一的な見解は得られていない（Thompson, 1993[1]を参照）のだが，概念上の問題はさておき，ここではThompson (1990)[2]やBridgesら（1995)[3]の定義に従い，情動制御を「快情動および不快情動の反応性（reactivity）を開始，維持，調整することに関する一連の諸過程」と捉え，論を進めることとする。なお，情動の反応性とは一般に，情動表出の強度や時間的特徴，情動経験の強さに影響するものと考えられており，その高低は生物学的個人差であるとみなされている。Bridgesらは，この反応性を調整する一連の行動を，情動制御の方略と呼び，反応性と方略という２つの構成要素の相互作用から情動制御は成り立つと考えている。

さて，高まった情動（特に不快情動）を制御するという現象は，従来，フラストレーション耐性や自己統制，対処といった概念の中で部分的には言及されてきた。しかし敢えてこれらの言葉を用いず，「情動制御」という術語を用い，情動研究の枠組みの中で取り扱うことの意義について，初めに述べておきたい。

まず，情動制御という概念について，情動観の歴史的変遷と切り離して論じることはできない[4]。1960年代頃

までは，ギリシャ哲学からの流れに基づく破壊的・無秩序的な情動観が優勢であり，こうした情動観の下では，情動は人間の理性，あるいは合理的な思考を乱す根本的に邪悪なものであり，ゆえに完全に除去されるのが望ましいと考えられてきた。しかし1970年代になると情動についての捉え方は大きく変化し，情動は根本的に適応的かつ合理的なものであるとみなされるようになった。この様な見解を代表するのが，機能主義と呼ばれる立場である。ここでは，情動は個人内現象であると同時に個人間現象であると定義され，人と環境との関係性にその主眼が置かれる[5]。機能主義では，あらゆる情動には，人の思考や行為，パーソナリティなどを動機づけ，組織化し，導くという，制御子（regulator）としての側面があることを強調する。しかしこれは機能主義者たちが情動の破壊的側面を認めていないということを意味するのではない。彼らは，情動には，行動の制御子としての情動"emotion as a behavioral regulator"および，制御される現象としての情動"emotion as a regulated phenomenon"（Thompson, 1990[2]）という，2つの側面があると考えている。Thompsonによれば，情動の適応的機能が発揮されるための条件こそが，後者の側面に焦点化した過程，すなわち情動制御なのである。言い換えれば，情動は根本的には適応的なものであり，情動を経験すること自体は避けるべきことではないのだが，ただし情動が適応的なものとして機能するためには，個人が統制可能な範囲内に情動の喚起が制御，維持されていることが必要であるのだ。このように現在の情動制御の概念の背景には，情動は適応的なものであるという基本的前提が存在する。

次に，情動制御は，単一のスキルとして独立に発達するようなものではなく，情動に関する他のスキル，例えば自身の情動状態を覚知する能力や，情動語や情動表現を用いる能力などの発達と密接な関連を持っている。対処研究の中で発達的傾向についての解明が遅れてきた原因の一つは，情動に関する諸スキルの発達が，全く考慮されてこなかったことにあるだろう。Saarni (1990)[6]は，情動に関する様々なスキルや知識を総称して情動的コンピテンスと呼んでいるが，情動的コンピテンスを構成する様々なスキルの発達を知ることによって，情動制御の発達についてもよりよく知ることが可能になると言えるだろう。

B　情動制御方略の種類

情動を制御する方略には様々なものがあるが，これらはいくつかの観点から分類することができる。ここでは，以降本稿で便宜上用いる3つの分類について紹介しておく。

一つは，問題焦点型と情動焦点型という，対処（coping）研究で用いられている分類（Lazarusら,1984[7]）である。問題焦点型の対処は，ストレスの原因である事象自体を改善するためになされる対処である。一方，情動焦点型の対処は，情動的苦痛を低減するためになされる対処であり，例えば回避，注意を逸らす，最小化といったやり方がこれに含まれる。

もう一つは，制御のタイミングによる分類である。すなわち，ある情動喚起が生じてから行われる反応的(reactive)制御と，ある情動が喚起される前になされる予期的（anticipatory）制御の二つに分類できる(Masters, 1991[8])。予期的制御とは，罰を避けるために嘘をつく，恐い物を見る前に目を閉じるなど，不快情動の生起を予防することを意図した行為であり，これは情動喚起状況の事前のコントロールと言い換えられるであろう。

最後に，年少児の場合には，自分自身の努力によって制御がなされるか，あるいは他者からの助けをかりて制御がなされるかによって，内在的（intrinsic）制御と外在的（extrinsic）制御とに区別されることがある。内在的情動制御については，情動制御の主体が自分自身であることから，情動の自己制御（emotional self-regulation）と呼ばれることもある。

発達的に見れば，行動レベルでの反応的な情動焦点型の制御（例えば指しゃぶりや視線の回避など）は生誕時から既に存在し，生後2年目の半ば頃になると，認知能力の発達にともない反応的な問題中心型の制御が出現する（Kopp, 1989[9]）ことが明らかにされている。

Ⅱ．歩行期における情動の自己制御の発達

A　情動制御研究における歩行期の位置づけ

情動の制御は，生物学的にも社会的にも不可欠であり，情動を自身で制御できるようになることは，幼児期の社会情動的発達の課題の一つと言える。それでは，子どもはいつ頃から，どの様な方法を用いて，自らの情動を制御していくようになるのだろうか。情動制御の発達に関してはいくつかの理論枠は呈示されているものの，その発達過程に関する体系的な研究は非常に限られているのが現状である。

2，3歳の時期は，俗に，欧米圏では"terrible two"，日本では「第一次反抗期」と呼ばれ，この時期の子どもの情動経験や情動表出の激しさは経験的には知られてい

る。Goodenough (1931)[10]の古典的研究にあるように，かんしゃくは2歳時にそのピークを迎え，以降減少していくという。情動制御の観点からは，この時期は，情動を制御する上で養育者の助けに依っていたものが，次第に独力で制御できるようになるまでの，過渡期と言える。歩行期が情動制御の発達の重要な時期であることは，精神医学の領域ではかねてから指摘されてきた。例えばMahlerら (1975)[11]は，この時期を，分離－個体化過程の最終段階と位置づけ，個体性の達成と対象の恒常性の達成をこの時期の課題としている。そして，大人たちの要求に対する多くの積極的な反抗や大きな欲求，自律への願望が見られる一方で，フラストレーションに耐える能力が増大するのがこの時期の特徴であると述べている。

このように理論上あるいは臨床的にはこの時期の重要性が指摘されてきたが，情動制御に関する研究全体で見ると，乳児期や年長の幼児を対象とした体系的研究に比べ，歩行期に焦点を当てた体系的研究は少ない。後述するが，このことは主に，方法的な問題に依るものと考えられる。一方で，記述的なレベルでは，情動制御の問題に触れた優れた研究は散見される。例えばその一つとして久保田 (1993)[12]は，他者との葛藤や対立の中で，自ら状況を展開させ葛藤の解決を図ろうとする，この時期の子どもの「主導性」あるいは「能動性」に着目し，子どもが自身の情動を扱おうと奮闘している様子を詳細に記した数々のエピソードを紹介している。ただし，こうした記述研究の直接的な焦点は情動制御の発達ではないことが多いため，情動制御の発達的変化がどのような機構によって生じるのかという点について詳しくは論じられておらず，理論的な裏付けは欠いたままである。そこで，本稿では歩行期における情動制御の発達について，最近の情動発達研究の知見を織り交ぜつつ，理論的整理を試みたい。

ここから論ずることの概略をまず述べておくと，歩行期の情動制御の発達は，表象機能の発達を基盤とした諸能力の発現によって特徴づけられるであろう。歩行期における認知発達は，Piaget (1962)[13]によれば，運動感覚期の第6段階から前操作期の第1段階にかけての変化として捉えられる。すなわち，運動感覚的なスキーマが内的な心的表象へと移行し，象徴的表象によって，言語能力やシンボルを構成する能力が発達する。これらの表象は，延滞模倣，イメージ，象徴的描画，象徴的遊び，言語の5つの形式をとるという。本稿では，延滞模倣や象徴的遊びを含むふりの行為，イメージ，言語と，情動制御の関連について論じる。ふりやイメージ，言語の発現は，直接的にも，間接的にも情動の制御に貢献すると考えられる。「直接的」とは，ふりやイメージ，言語そのものが，情動反応を制御する制御子として機能することを意味し，「間接的」とは，それ自体が情動反応の制御子として機能するわけではないが，情動に関する知識の精緻化，あるいは情動に関する認知的な枠組みの構築を助け，その結果として情動の制御に貢献することを意味する。

B　ふりやイメージの発達と情動制御

B－1　ふりの行為と情動についての理解

1歳半を過ぎるあたりから，ふりの行為やふり遊びが盛んに見られるようになる。ふりの場は，特に幼児期の初期においては，情動に関する知識を得，また情動についての理解を深める機会を提供すると考えられる。Wellmanら (1995)[14]は，日常のやりとりにおける家庭内での子どもの情動語の使用を縦断的（2～4歳時）に検討し，早期から，ふりの中で情動語が使用されることを認めている。また，彼らは，子どもの発話中の情動語が，誰の情動状態について言及したものであるかを調べ，2歳時においては，自分自身の情動への言及に次いで，ふり上の人物の情動への言及が多いことを明らかにしている。発話中の全情動語に対し，ふり上の人物の情動に言及した率は2歳時でもっとも高く，以降年齢が上昇するにつれ，自分自身の情動への言及は増加する一方で，ふり上の人物の情動への言及は減少したという。このようにWellmanらの研究は，情動語の習得においてふりの場が重要な場面の一つであることを裏付けている。

情動理解との関連でふりの行為の機能について述べるならば，ふりは，情動に関する情報処理機構の一つと言うことができる。ただし，ふりの行為を通して獲得，理解される知識の性質については一言触れておく必要があるだろう。表象は，最初のうちは，Piaget[13]が操作的思考と呼ぶ，分類構造という観点から，あるいはBruner[15]が語用論的思考と呼ぶような，言語によって組み立てられる論理的思考という観点から組織化されているのではなく，日常の諸事象の枠組みである，イベントスキーマあるいはスクリプトといった観点から組織化されるという (Bretherton, 1984[16]; Singerら, 1990[17])。これらの枠組みは，主体と受け手，対象間の空間的，時間的，因果的な関連を表象しており，現実と同型 (isomophic) のものであることから，Brethertonはこれらを比喩的 (figurative) 表象と呼んでいる。この時期に獲得される情動の誘発因，情動経験，情動制御などに関する知識も，初めは比喩的表象として，一連のイメージとして保存されているであろう。そして，ある情動を

めぐる諸経験が反復されることで，より分化しかつ一貫性を持った情動に関するスクリプトあるいはスキーマが形成され，情動に関する理解が深まっていくものと考えられる。

ふり遊びと情動理解との関連を支持する証左が，最近の情動研究の中で提出されつつある。例えばYoungbladeら[18]は，33カ月の時点できょうだいとのふり遊びの量が多かった子どもは，40カ月の時点において，情動理解の課題の成績が良かったことを報告している。

B－2　情動制御の過程として現れるふりの行為

1では，ふりという行為の持つ認知的機能から，情動との関連について触れてきた。次に情動反応の制御子としてのふりの機能について考えることとしよう。

先に述べたように，情動に関する経験は，最初は一連のエピソードとして保存されているであろう。これらの知識が，実際の情動制御の場面でふりの行為を通して垣間見られることがある。すなわち，ある不快が生じたときに，過去の同様の場面で用いられた情動制御行動が再現されることがある。例えば，子どもが痛みを経験したときに，自分自身で患部を撫でて「イタイノイタイノトンデケ」と言うなどの行為である。また筆者の観察したある男児（33カ月）は，自分がレゴで作った作品を母親に見せようと持ってきたところ，その作品が手から落ちて壊れてしまった。児は泣くふりをし，そして作品を拾い上げて作り直した後，あたかもそこに本当に人がいるかのように，人を抱きしめ撫でるような素振りをした。これらはふりというより，延滞模倣といった方が的確であるかも知れないが，いずれの例も，過去に同様の場面で養育者から受けた慰めの行為や言葉を，子どもが自身で再現したものである。これらのエピソードからは，この時期の子どもが，自分自身が情動経験の主体であるという認識を有していると同時に，情動制御の主体でもありうるという認識を有していることが伺える。このように，模倣やふりは，外在的制御から内在的制御への移行を支えるメカニズムの一つであると言うことができよう。

ふりの行為には，満たされない願望を代替的に満たすことで，不快な情動を沈静化させる機能があると考えられている。このようなふりの情動的側面は，主に遊びに関する考察の中で指摘されてきた。例えば精神分析の立場では，ふり遊びやごっこ遊びは，子どもの欲求不満や不快を解消し，精神の均衡を保つ機能を持つと考えられてきた（例えばErikson, 1940[19]）。Vygotsky（1967）[20]の遊びの発生に関する考察にも，同様の言及が見られる。Vygots-kyによれば，就学前の年齢になると子どもは，多くの実現不可能な願望や，すぐには実現化されないような願望を持つようになるという。この長期的な，実現不可能な願望が発達において現れる時に，遊びは現れる。すなわち，子どもは実現可能性の低い願望を持つ一方で，それをすぐに満たしたいという願望も持っている。子どもは2つの葛藤する願望を持つことになるが，この実現されない願望を想像の上で満たすがために遊びは生じるのだという。

最後に，厳密にはここで用いてきた情動制御という語の指す範疇外のことではあるかも知れないが，心理療法の中などで生じる，不快情動の解消のプロセスについて触れておく。遊びは，特に年少児を対象とした心理療法の中で用いられることがある。Singerら[16]は，「不快な情動は，直面した刺激の新奇性や予測不可能性が高く，既存のスキーマとの不一致度が高い時に生じる」というTomkins（1962）[21]の考えに基づき，プレイセラピーの中で苦痛が解消される過程について次のように論じている。すなわち，ふり遊びは，子どもに新しくかつ多様なスキーマを作る機会を与える。子どもの恐れや不安，怒りの原因である，既存のスキーマと現実の世界との間のギャップは，新たなスキーマが形成されることにより埋められ，その結果子どもの不快な情動は減じるのだという。また，ふり遊びを経て獲得された新たなスキーマは，環境に対する個人の統制感を増大させたり，障害やフラストレーションを扱う新しい方法のガイドラインを子どもに提供する機能も果たすという。ただし，ふり遊びの場は，Thompson[2]の言うように，情動が「安全に」再生される場であるため，必ずしも即時の制御を必要とするような強い情動を子どもがそこで経験しているとは限らない。また，心理療法などで扱われるのは，慢性的，あるいは長期的に持続している不快な情動であり，その解消にも，既存のスキーマと現実の世界との間のギャップを埋める新たなスキーマが形成されるに足る十分な時間を要するという点で，一般に情動制御という語によって指示される不快情動の解消過程とは異なることを付加しておく。

B－3　心的イメージの発達と情動制御　－認知的情動制御方略の発現－

ここまでは，情動理解におけるふりの意義と，ふりという実際上の行為を伴った情動制御の過程について述べてきた。表象能力がさらに発達すると，行為の再現を伴わずとも，想像の中で行為を再現することが可能になる。したがって，生後3年目も終わり頃に近づくと，イメージを操作することで情動を制御することが可能になり，実際の行為を伴わない，認知的な情動制御の方略が出現すると言えよう。このことは，愛着の研究や，満足の遅

延に関する研究の中で指摘されてきた。

Bowlby (1969)[22]は，生後3年目の終わり頃からの時期を，愛着の第4段階「目標修正的なパートナーシップの形成」と位置づけている。この時期，子どもは母親を時間的，空間的に永続し，空間・時間の連続において多少予測できる動きを示す対象として考えられるようになる。そして，母親の設定目標のいくつかについて推察できるようになり，母親の行動や状況を観察したり，過去の母親の行動に照合したりすることで母親の欲求や意図を理解できるようになる。また，長い間母親が不在であっても母親の居場所や帰宅時間を知らされていれば，落ち着いて一人でいられるようになるという。すなわちこれは，母親との分離により生じる不快にではなく，イメージとしての母親や，母親は帰ってくるという将来の見通しに焦点化することにより，不快情動を制御することが可能になるということである。

このように，実際の行為を伴わずに不快以外のものに注意を焦点化すること，あるいは表象を維持したり操作したりすることによって情動を制御するという，認知的な情動制御の方略の使用は，母親との分離場面以外の様々な事象にも拡張できよう。それは例えば，現在の不快が近い将来除去されるという見通しを持つことであったり，あるいは現在の不快とは関連のない事象を想起することであったりするだろう。満足の遅延行動に関するMischelらの研究 (1970)[23]では，将来の報酬を思い浮かべたり，報酬とは無関係の楽しいことを思い浮かべるなどといった認知的方略によってフラストレーションに耐えることが，3歳児でも可能であることが示されている。

また，想像上の友だち (imaginary playmate) を持つことも，この頃に出現する，情動制御の認知的方略の一つと言える。Singerら[16]によれば，2～6歳くらいの子どもの多くが想像上の友だちを持っているという。Singerらは，想像上の友だちは，子どもが淋しさや無力感，闇や未知への恐怖に対処するために生み出す方法の一つであると述べている。彼らは，想像上の友だちを持つことが，男児においては快情動と正の相関，退屈などの不快情動とは負の相関を持つことを，また，女児においては，怒りや恐れといった不快情動と負の相関を持ち，特に悲しみと相対的に高い負の相関を持つことを明らかにし，想像上の友だちを持つことが，子どもの情動的な安寧と関連を有することを示唆している。

C　言語の発達と情動制御

C－1　言語と情動についての理解

言語は，子どもが情動を理解する上での強力な道具である。特に，生後18カ月～3歳くらいまでの間に，情動について話す能力は急激に増大する[24)25)]。情動に関する会話は，情動経験に対する反省的な意識を高め，その結果メタ情動的な理解 (meta-emotive understanding) の発達を促すことになる (Stern, 1985[26];Thompson, 1990[2])。

会話の中では，情動に関する様々な知識，例えば，情動の誘発因，情動制御が必要とされる状況，情動の表出や制御の結果，情動制御の方略についての知識が大人から子へと伝えられる。しかし，子どもはこれらの知識の受動的な受け手であるのではなく，自らが情動に関する会話を積極的に取り交わすことを通して，情動に関する概念を作り上げていくと言える。Dunnらは，一連の研究を通して，家族の中での会話が，子どもの情動理解の発達において重要な役割を果たすことを明らかにしてきた。例えば，Dunnら (1991)[27]では，36カ月時における感情についての親子の会話と，6歳時における情動の理解との関連について調べ，36カ月時の情動に関する会話量，情動の生起に関する因果関係への言及の量，テーマの多様さのいずれもが，後の情動の理解と関連を有していることを明らかにしている。さらにDunnら (1991)[28]は，単に親子の間での会話の量が多いということではなく，子どもが自身の情動や自身の行動の因果関係への言及を多くしていた場合に，その後の情動についての視点獲得課題や誤信念課題での成績が良かったことを示し，子ども自身が情動をめぐる言語的やりとりに積極的に関わるということが重要なのだと主張している。

また，Dunnらは，情動についての理解を促す社会的な文脈として，葛藤を含んだ相互作用が重要であるということを指摘している。例えば，Dunnら (1994)[29]は，親が子の快情動よりも不快情動に対してより多くの説明を行っていることを示し，さらに家庭内での不快情動の表出が過剰ではなく，かつ不快に対する親からの言語的フィードバックが多い場合に，子どものその後の情動についての理解の成績がよいことを示している。これは，情動を制御する必要のある場面を子どもが適度に経験しており，なおかつそれに対する他者からの言語的フィードバックを通して，自身の情動に関する諸過程を対象化するという経験を持つことが，情動の理解を促進させる，という可能性を示唆していると言えよう。

C－2　情動の制御子としての言語

言語は，自身の情動過程を対象化する道具としてのみでなく，情動をコントロールする道具としても機能する。例えば，Thompson[2]は，言語の使用により，自分を慰めるための自己内対話が可能になると指摘している。ま

た，先述のとおり，生後3年目になると認知的な情動制御の方略の使用が可能になるが，言語はこれらの方略の使用を容易にするであろう。例えば，母親との分離時に「おかあさん」と繰り返し呟くことで母親のイメージを保持したり，歌を歌うことで気晴らしを図るといったことが可能になる。

さらに，情動制御に貢献するものとして，言語発達にともなう要求表現の洗練化と，情動語の使用をここでは挙げておきたい。

機能主義の立場では，情動は目標構造との関連で生じると考えるが，これに従えば，要求－拒否表現の発達と情動制御との間には関連があると想定される。一児の生後二年間の要求－拒否表現の発達を精緻に検討した山田(1982)[30]は，非言語的なコミュニケーションから言語的なコミュニケーションへの発達を，泣きの減少，情動の距離化，情動の自己制御の過程であると解釈している。実際，生後2，3年目は，言語による要求－拒否表現の発達が顕著な時期である。例えば，Kopp (1992)[31]は，玩具の片づけを養育者から要請されるという場面で，年長の子には泣きが少ない一方で，拒否や交渉といった発言が多く見られたことを明らかにしている。また，Kuczynskyら (1987)[32]は，従順さ (compliance) に関する研究の中で，1歳半～3歳半の子どもとその親を対象に，親の要請に対する子の反応を調べ，子どもが用いる方略の発達的変化について検討している。その結果，加齢にともない，直接的な反抗（かんしゃくやぐずりを含む，怒りや不快情動をともなう明らかな拒否）は減少し，交渉，すなわち交換条件や代わりの解決方法や妥協策を提案したり，説明を求めたり，自分から説明を加えたりすることが増加することを確かめている。これを問題焦点型の対処という観点から考えると，言語的要求表現が洗練されることで，他者に自分の要求を的確に伝達出来るようになり，そのため不快を除去する上で他者からの援助を得やすくなると言えるだろう。また，他者との葛藤が不快の原因である場合には，交渉という，他者に受け入れてもらいやすいような表現で自分の要求を伝えることによって，要求実現の可能性を高めることができると言えよう。

情動語の使用も，新たな情動制御の方略の一つとして機能するであろう。Dunnら (1987)[33]は，母親やきょうだいとの言い争い (dispute) の場面における子どもの言い訳 (justification) について，生後18カ月～36カ月の間の変化を縦断的に調べた。その結果，言い訳は24カ月から36カ月の間に増加したこと，また内容面では，年齢に関わらず権利や慣習などに関する言及に比べ，自分自身の感情への言及がもっとも多いことを明らかにした。このように他者との葛藤状況で自身の感情に言及することは，鬱積した情動を吐き出すという機能や，あるいは自身の情動状態を他者に伝えることで他者からの慰めを引き出すという機能を有すると推測される。

Ⅱ－D　情動理解の発達と情動制御

これまで，ふりの行為や言語の使用などにより情動に関する知識や概念が精緻化されていくということを述べてきた。事実，情動に対する基本的な概念は歩行期の間に獲得されることが明らかにされてきている。2～3歳の時期に，子どもは，基本情動に関してはそれを引き起こす状況との関連を理解し始める[34]。また，Well-manら (1995)[19]は，2歳児5名の自然場面における発話を詳細に分析し，2歳児でも情動について説明する際に，情動の誘発因や志向対象について言及していたことを確かめている。さらにWellmanらは，年少児は情動について，状況と情動の間には単純な対応関係がある，という状況的な理解の仕方をしているだけではなく，状況に関する個人の主観的な評価を媒介として情動が引き起こされうる，ということをも認識している可能性を示唆している。

それでは，情動に関する知識や概念の獲得は，情動制御の方略にどのような変化をもたらすのであろうか。Thompson[2]は，子どもが情動に関する知識を獲得すると，情動制御の方略を同定し，遂行する能力が出現すると述べている。情動の喚起や表出の原因や結果，情動制御の方法について考えることができるようになると，子どもは情動を制御するいくつかの選択肢の中から，状況に応じた，より適切でより効率的な方略を選択することが可能になるのであろう。さらに，情動に関する知識が増し，情動制御に対する有能感が獲得されることで，情動の自己制御への動機づけが高まると考えられる。

情動の誘発因やその結果生じる情動経験についての理解が深まると，問題焦点型の対処が洗練されるだろう。先に述べたとおり，問題焦点型の対処とは，ストレスの原因である事象自体の改善のためになされる対処であるが，発達的に見ると，これは因果関係の理解や再生記憶能力の増大に伴い，生後2年目の中頃に出現するという[9]。表象能力の発達にともない，情動に関する理解が精緻化されてくると，次の2つの変化が生じると考えられる。一つは，不快の原因を除去する上でもっとも有効な方略を選択したり，複数の方略を組み合わせて用いたりすることで，より迅速にかつより確実な方法で，不快

の原因の除去が行えるようになるということである。もう一つは，将来の情動反応の予測が可能になることで，強い不快が生じると予測される状況に遭遇したときに，事前に不快情動の生起そのものを妨ぐための行動をとるという，予期的な問題焦点型の制御が可能になるということである。予測的な情動制御の方略の例として挙げられるのが，感覚の遮断行動や罰を回避するために嘘をつくといった行動である。

感覚の遮断行動とは，目をつむる，耳をふさぐなどして，不快の原因である刺激の入力を自発的に遮断することである。この方略の自発的な使用は，満足遅延の実験では6歳児に確認されているが[35]，逸話レベルでは，2歳頃から観察される。高橋（1995）[36]では，ストレンジシチュエーションの中で23カ月の女児が，ストレンジャー役の女性の話しかけに対し，目をしっかりと閉じ，その女性を見ようとしなかったという例が紹介されている。

嘘も，感覚の遮断行動同様，2歳ころから認められ始めると言われている。嘘は，その目的によって他者の感情を傷つけないための嘘，自分自身に対する嘘，罰を避けるための嘘に分けられるが，最も初期に現れるのが，罰を回避するための嘘だと言われている（Lewis, 1993[37]）。嘘をつくという行為は，罰を受けることによって生じる不快が生じることを予防するという点で，予期的な情動制御の一方略であるということができるだろう。

このように理論上は予期的制御の出現は生後3年目の初め頃に位置づけられると考えられるが，予期的制御の発現を扱った研究は今のところなく，実際にはよく分かっていない。

Ⅲ．まとめ

本稿では，ふりと言語の出現という観点から，歩行期の情動制御の発達について二つの道筋を示した。一つは，情動反応を制御する新たな道具として，ふりやイメージ，言語の使用が可能になること，もう一つは，ふりおよび言語という二つの相補的な様式によって情動理解が促進されることにともない，情動制御方略が洗練化されることである。ただし，これらはあくまでエピソード的なデータから導かれた理論的仮説にすぎず，今後の検証が必要である。その検証に向け，最後に方法論上の問題について述べておく。

先に，歩行期を対象とした情動制御の研究が稀少であるということを述べたが，これは主に方法上の問題に起因すると考えられる。すなわち，歩行期の子どもを対象とした情動制御研究で用いられる状況や手法は非常に限定されている。設定状況としては分離場面や満足の遅延といった場面が主であり，また手法としては観察が主である（例えば[38][39]）。

しかし，日常的には情動の制御が行われる場面は多様である。この時期の子どもにかんしゃくが生じる状況として多いのが，日常の養育活動と遊びである[10]ことを考慮すれば，親との間や友だちとの間で交わされる相互作用過程について，情動制御という観点から分析した研究も必要であろう。また、生態学的妥当性という観点からすれば，統制された実験状況下で生じる情動制御の方略が，果たしてこの時期に生じる変化や子どもが日常用いている方略を反映しているかについては，もう少し慎重になるべきだと思われる。例えば，計画性にとんだ問題焦点型の方略や予期的な問題焦点型の方略は，おそらく子どもにとって馴染みの少ない，統制された実験状況下よりも，子どもが日常慣れ親しんでいる状況において生じやすいのではないかと推測されるからである。

また，歩行期に生じつつある認知的方略は，外的には現れにくく，ゆえに観察といった方法により捉えることは困難である。一方で，2，3歳児には，情動過程や情動制御の過程を自己報告する程の内省能力や言語能力が十分備わっているとは言えず，年長児に対して用いられているようなインタビューといった手法の使用も有効ではない。そこで一つ提案される方法が，語りや投影法といった手法の利用である。語りから引き出される知識は，先述のとおり，言語によって組み立てられる論理的な知識ではなく，イベントスキーマあるいはスクリプトといった形の知識である。子どもは2歳半頃までには家族の中で様々な語りに参加しており（Miller, 1994[40]），Fivushら[41]によれば，親子の間で交わされる情動についての語りの中では，情動制御の過程についても言及される。この時期の子どもが有している知識の形態を考えれば，語りの利用は有効なのではないかと考えられる。また，投影法といった手法を用いれば，子どもに過度の苦痛を経験させることなく，情動制御に関する知識を引き出すことが可能である。さらに，認知的な方略の使用は恐らく，状況によっても規定されるものであり，頻度としてさほど多く見られるものではないと思われる。したがって，短時間の実験状況や観察でそれを捉えることは困難であると予想される。Zahn-Waxlerらは子どもの情動反応に関する研究[42]で，母親による報告を用いて成果をあげているが，情動制御の発達の変化を捉えるには，こうした方法の使用も有効なのではないかと考えられる。

本稿では，情動制御における主体性の増大や，情動過程についての自己評価などとの関連という点で重要と考

えられる，自己の発達については論じられなかったが，この問題については稿を改めて考察したいと思う。

（指導教官　市川伸一助教授）

引用文献

1) Thompson,R.A. 1993 Socioemotional development: Enduring issues and new challenges. Dev. Review, 13, 372-402.
2) Thompson,R.A. 1990 Emotion and self-regulation. In R.A.Thompson (ed.), Socioemotional development. Nebraska Symposium on Motivation (Vol.36), Univ. of Nebraska Press, pp.367-467.
3) Bridges,L.G. & Grolnick,W.S. 1995 The development of emotional self-regulation in infancy and early childhood. In N.Eisenberg (ed.), Review of personality and social psychology (Vol.15). Sage, pp.185-211.
4) Izard,C.E. & Kobak,R.R. 1991 Emotions system functioning and emotion regulation. In J.Garber & K.A.Dodge (eds.), The develpment of emotion regulation and dysregulation. Cambridge Univ.Press, pp.303-321.
5) Campos,J.J., Campos,R.G. & Barrett,K.C. 1989 Emergent themes in the study of emotional development and emotional regulation. Dev. Psychol., 25, 394-402.
6) Saarni,C. 1990 Emotional competence: How emotions and relationships become integrated. In R.A.Thompson (ed.), Socioemotional development. Nebraska Symposium on Motivation (Vol.36), Univ. of Nebraska Press, pp. 115-182.
7) Lazarus.R.S. & Folkman,S. 1984 Stress, appraisal, and coping. Springler Publishing Company.
8) Masters,J.C. 1991 Strategies and mechanisms for the personal and social control of emotion. In J.Garber & K.A.Dodge (eds.), The develpment of emotion regulation and dysregulation. Cambridge Univ.Press, pp.182-207.
9) Kopp,C.B. 1989 Regulation of distress and negative emotions: A developmental view. Dev. Psychol., 25, 343-354.
10) Goodenough,F.L. 1931 Anger in young children. Univ. of Minnesota Press.
11) Mahler,M.S.& Pine,F.& Bergman,A. 1975 The psychological birth of the human infant. Basic Books.
12) 久保田　正人　1993　二歳半という年齢　認知・社会性・ことばの発達　新曜社
13) Piaget,J. 1962 Play, dreams, and imitaion in childhood. Norton.
14) Wellman,H,M.,Harris,P.L.,Banerjee,M. & Sinclair,A. 1995 Early understanding of emotion: Evidence from natural language. Cognition & Emotion, 9, 117-149.
15) Bruner,J. 1986 Actual minds, possible worlds. Harvard Univ. Press.
16) Bretherton,I. 1984 Representing the social world in symbolic play: Reality and fantasy. In I.Bretherton (ed.),Symbolic Play : The development of social understanding. Academic Press. pp.1-41.
17) Singer,D.G. & Singer,J.L. 1990 The house of make-believe : Children's play and the development of imagination. Harvard Univ.Press.
18) Youngblade,L.M. & Dunn,J. 1995 Individual differences in young children's pretend play with mother and sibling : Links to the relationships and understanding of other people's feelings and beliefs. Child Dev., 66, 1472-1492.
19) Erikson,E.H. 1940 Studies in the interpretation of play. Genetic Psychology Monographs, 22, 561.
20) Vygotsky,L.S. 1967 Play and its role in the mental development of child. Soviet Psychology, 5, 6-18.
21) Tomkins,S.S. 1962 Affect, imaginary, consciousness. 2vols. Springer.
22) Bolby,J. 1969 Attachment and loss: Vol.1. N.Y.:Basic Books.
23) Mischel,W.& Ebessen,E.B. 1970 Attention in delay gratification. J. Personality and Social Pshychol., 16, 329-337.
24) Bretherton,I.& Beeghly,M. 1982 Talking about internal states : The acquisition of an explicit theory of mind. Dev. Psychol., 18, 906-921.
25) Dunn,J., Bretherton,I. & Munn,P. 1987 Conversations about feeling states between mothers and their young children. Dev. Psychol., 23, 132-139.
26) Stern,D. 1985 The interpersonl world of infant : A view from psychoanalysis and developmental Psychology, Basic Books.
27) Dunn,J.,Brown,J.& Beardsall,L. 1991 Family talk about emotions, and children's later understanding of other's emotions. Dev. Psychol., 27, 448-455.
28) Dunn,J.,Brown,J,.Slomkowski,C.,Tesla,C. & Youngblade, L.M. 1991 Young children's understanding of other people's feelings and beliefs : Individual differences and their antecedents. Child Dev., 62, 1352-1366.
29) Dunn,J.& Brown,J. 1994 Affect expression in the family, children's understanding of emotions, and their interaction with others. Merrill-Palmer Quarterly, 40, 120-137.
30) 山田　洋子　1982　0～2歳における要求－拒否と自己の発達　教育心理学研究，第30巻，128-137.
31) Kopp,C.B. 1992 Emotional distress and control in young children. In N.Eisenberg & R.Fabes (eds.), Emotion and its regulation in early development. Jossey-Bass Publisher, pp.41-56.
32) Kuczynsky,L.,Kochanska,G.,Radke-Yarrow,M. & Girnius-Brown,O. 1987 A developmental interpretation of young children's noncompliance. Dev. Psychol., 23, 799-806.
33) Dunn,J.& Munn,P. 1987 The development of justification in disputes. Dev. Psychol., 23, 791-798.
34) Harris,P.L. 1985 What children know about the situations that provoke emotion. In M.Lewis & C.Saarni(eds.), The socialization of emotions. Plenum Press, pp.161-186.
35) 氏家　達夫　1980　誘惑に対する抵抗に及ぼす統制方略の効果の発達的検討　教育心理学研究，第28巻，284-292.
36) 高橋　恵子　1995　自立への旅立ち　ゼロ歳～二歳児を育てる　岩波出版
37) Lewis,M. 1993 The development of deception. In M.Lewis & C.Saarni (eds.), Lying and deception in everyday life. The Guilford Press, pp.90-125.
38) Grolnick,W.S.,Bridges,L.J. & Connell,J.P. 1996 Emotion regulation in two-year-olds : Strategies and emotional expression in four contexts. Child Dev., 67, 928-941.
39) Gerner,P.W. 1995 Toddler's emotion reulation behaviors : The role of social context and family expressiveness. J. Gen. Psychol., 156, 417-430.
40) Miller,P.J. 1994 Narrative practices : Their role in socialization and self-construction. In U.Neisser & R.Fivush (eds.), The remembering self. Cambridge Univ. Press, pp.158-179.

41) Fivush,R. 1994 Constructing narrative, emotion, and self in parent-child conversations about the past. The remembering self. In U.Neisser & R. Fivush (eds.), The remembering self. Cambridge Univ. Press, pp.136-157.
42) Zahn-Waxler,C.,Radke-Yarrow,M. & Wagner,E. 1992 The development of concern for others. Dev. Psychol., 28, 126-136.